

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	序
Sub Title	
Author	堀江, 湛(Horie, Fukashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1987
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.60, No.12 (1987. 12) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高鳥正夫教授退職記念号
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19871228--005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19871228--005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 序

高鳥先生から退職の御相談を受けたのは昨年新学期がはじまって間もない頃のことであった。慶應義塾大学法学部の大先輩英修道先生が東横女子短大の学長を突然御勇退になり、これまでになにかと英先生を補佐してこられた高鳥先生に同大学より学長就任の強い要請があったことであつた。

春先、慶應病院に御入院中の英先生のお見舞にうかがつた時、大学のことは高鳥君に任せてあるので心配はないとおっしゃりながら、退院に備えて院内で軽い運動をはじめたと嬉しそうな先生に、お花見は御自宅でと申し上げて帰つてきただけに、私には両先生のお立場も東横女子短大の御事情もよくわかつていた。

そんなわけで法学部にとってかけがいのない高鳥先生ではあつたが、御転出をいつまでもお引きとめするわけにもいかず、前期授業の終るのを待つて八月一日付で先生は東横女子短大の学長に御就任になつたのであつた。

高鳥先生は、お若い頃法学部の先輩諸教授の信頼と期待を一身に集めておられた。また先生は、これら諸先輩に実によく仕えられた。大学紛争の続いた昭和四十年代の十年間、さまざまな委員会で先生と御一緒する機会が多かつたが、先生はいつも食事時のお弁当の準備や片付けの先頭に立たれ、最年少の恐縮する私に、ちょっとはにかみながら、お互いこんなことをやっているので偉くはなれないねとおっしゃるのが口ぐせであつた。考えてみると、先生はどちらかといえ幕僚タイプであられたような気がする。しかし先生は図書館長、図書館が情報センターに昇格してか

らは、情報センター所長と、ラインのトップとして塾の最高の要職を長くお勤めになり、三田の新図書館建設という大事業を完成された。

所長としての先生は部下の進言をよく用いられた。完全主義者の先生からみれば、下僚の企画がお気に召したとは思えないが、ラインの長としての御自覚から、御自分が手をだしたいのをこらえられ、目をつぶってこれに乗られたものであろう。

学生時代、私が始めて先生の御講義を拝聴した当時、今から考えると先生は三〇歳になったかならないかのお若さであった筈であるが、すでに御講義ぶりは落ち着きはらった堂々たるものであった。その頃、先生はこの「法学研究」に毎号のように論文を発表され、そのエネルギーなお仕事ぶりに学生ながらも驚かされたものである。政治学を専攻する私は商法については門外漢であるが、先生の学風は大向うをうならせる論争的問題提起というよりも、論争のあとの交通整理をし、見落されている問題点を指摘するといった先生のお人柄のじみでた手堅いものであったような印象を受けている。

高鳥先生は、田中実、伊東乾先生とならんで今日の法律学科の隆盛をもたらされた三本柱であった。先生の去られた法律学科の痛手は大きい。しかし先生の義塾における行政経験が東横女子短大長として花開き、わが国における女子高等教育のさらなる発展につながるとするならば、御名残り惜しさはひとしおであるが、われわれは今先生の御転出を喜んでお送りしないわけにはいかないであろう。

昭和六二年一〇月

法学部長 堀江 湛